# マンハッタン＝レクイエム

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンハッタン＝レクイエム

【Ｎコード】

Ｎ５４１５Ｎ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ニューヨークの青年ギリアムは車でホットドッグ屋をやっていた。その彼にテナントをくれた老人。だがその老人はある日。アメリカを舞台にした人生のお話です。

# 第一章

マンハッタン＝レク

イエム

ニューヨーク。この街は眠らない。

その眠らない街でだ。彼はいた。

ギリアム＝キッシンジャーはこの街に生まれこの街で育ってきた。両親が経営していたホットドッグ屋をそのままやっている。背の高い黒人の青年だ。

ハイスクールを出てすぐに店の手伝いに入った。そして二十歳になった時にだ。何故か両親が急にこんなことを言い出してきたのである。

「御前はここに残れ」

「私達はロスに行くからね」

「何だ？ロスで店を開くつもりかよ」

こう冗談交じりに返すとだった。その通りだった。

「ああ、そうさ」

「そこでね。店を開くよ」

「本当かよ」

ギリアムはそれを聞いてだ。まずは眉を顰めさせた。

そのうえでだ。いぶかしむ顔でまたその両親に問うた。

「本当にロスに行くのかよ」

「ああ、そうだよ」

「ニューヨークの店はあんたに任せるからね」

「それをやって食えってことか」

両親の言いたいことは充分わかった。

「そういうことか」

「ああ、わかったな」

「そういうことでね」

「しかし。何でいきなりロスなんだ？」
ギリアムにはそれがわからなかった。話を聞いてもどうしてもだった。
「あったかいからか？ニューヨークよりも」
「よくわかったな」
「勘がいいじゃない」
「それでか」
自分の予想が当たってそれで気分がいいかというと別にそうでもなかった。何しろ急に言われたのでそれでいぶかしむばかりであったからだ。
「しかし。それでも」
「腑に落ちないか」
「そういうことなのね」
「俺が腑に落ちなくても行くんだよな」
こう両親に問い返した。
「そうだよな」
「ああ、そうだよ」
「そういうことでね」
こんな話をしてだった。両親は本当にロサンゼルスに行ってしまった。そしてそれからは時々メールや手紙が来る。そこでのホットドッグ屋は結構繁盛しているらしい。
ギリアムはニューヨークで黄色い車を使ってそれでホットドッグ屋を続けていた。マンハッタンに出てそのうえでホットドッグを売っている。
彼のホットドッグは安くて美味い、しかも大きいということでわりかし繁盛している。少なくとも食べるのに困ることも家賃や生活費に窮することもない。一人で暮らすには充分過ぎる程の暮らしは手に入れていた。
この日も摩天楼の下でホットドッグを売っている。天を衝かんばかりの白い高層ビルが連なるその道路のところでだ。彼は店を開い

ているのだった。
そしてそこでだ。道を行き交う人々やビジネスマン達にホットドッグを売っていた。
「美味いぜ、うちのホットドッグはな」
笑顔で言いながらの言葉だった。
「さあ、どんどん食いな。飲み物もあるぜ」
「ああ、じゃあ貰おうか」
「飲み物はコーラな」
「コーヒーあるかい？」
「ああ、あるぜ」
笑顔でこう言ってであった。すぐにそのコーヒーも注文した客に出すのだった。
「ほら、飲みな」
「ああ。しかしこのコーヒーな」
「どうしたよ」
ジャケットの若い、自分と同じ位の年齢の白人の客に応える。その顔にはそばかすがありそれが妙に似合った顔をしている。
「まずいってのかい？」
「味はいいけれど熱いな」
その白人の客はホットドッグを右手に、コーヒーが入った使い捨てのコップを左手に持ってそれを飲みながらだ。こう言うのだった。
「それもかなりな」
「寒いからな。それで熱くしたんだよ」
「それでかい」
「ああ、それでさ。駄目か？」
「ああ、いいな」
客は満足した顔で述べた。

## 第二章

「ホットドッグも美味いしな」
「そうだろ。じゃあもう一個食うか？」
「そうさせてもらうよ。腹が減ってるしな」
「毎度あり」
笑顔で返す。黒い肌に白い歯が見事に映える。彼は店になっているその車の中からホットドッグを次々に出す。ワゴンのその後ろをカウンターにしていてそこにメニューや値段を書いた紙を掲げている。そこで応対をしているのだ。
彼はマンハッタンで気軽に商売を楽しんでいた。そんなある日のことだ。
その彼のところにだ。ふと一人の老人が来た。見れば背中が曲がっていて小柄な。肌がやや黒いはっきりとした目の老人であった。
その彼がだ。ギリアムのそのホットドッグを食べてだ。こう言うのであった。
「美味いな」
「当たり前だろ」
彼は明るく返した。老人に対してもだ。
「俺のホットドッグはニューヨーク一だぜ」
「ニューヨーク一か」
「そうさ、ニューヨーク生まれのニューヨーク育ち」
このことも自分から話すのだった。
「だからニューヨークの味はよくわかってるのさ」
「そうなのか」
「そうさ、それで気に入ってくれたんだな」
「確かにな。いい味じゃ」
「じゃあもう一個どうだい？」
さりげなくこう誘うのだった。

「もう一個。サービスしとくからな」
「そうじゃな。それではもう一個な」
「ああ、貰うか」
「毎度あり」
こうして老人はもう一個頼む。そうしてまた食べるのだった。
老人はこうしたことを一週間続けてきた。次第に顔馴染みになりだ。ギリアムも彼に親しく声をかけるようになっていた。
そしてだ。その中でだ。老人はこの日もホットドッグを食べていた。それを食べながら言うのだった。
「さて」
「どうした？」
「あんたこのままずっとここでいるのかな」
こうギリアムに尋ねてきたのだ。相変わらず店になっている車の中でホットドッグを調理して店の前に置き売っている彼に対してだ。
「ここにな」
「ああ、そうさ」
ギリアムは笑顔で老人の今の言葉に応えた。
「ホットドッグ屋が俺の天職だしな」
「天職か」
「親から受け継いだ店だけれどな。それでもな」
「合っているというのじゃな」
「食い物料理するの好きだしな」
老人にこうも話してみせた。
「だからな。ずっとここでやっていくさ」
「左様か」
「それでいいよな」
そしてだ。老人に対して問い返すのだった。
「別に悪いことはしていないしな」
「いいさ。ただ」
「ただ？」

「店を持つ気はないか？」
ギリアムの顔を見ての言葉だった。
「店をじゃ」
「店ならこの車がそうなんだけれどな」
「いやいや、屋台ではなくしっかりとした店じゃ」
そちらだというのである。
「ストアじゃよ」
「ストアか」
「その店を持つ気はないか？」
こう彼に問うのであった。
「それはじゃ。どうじゃ」
「ああ、ストアな」
それを聞いてであった。ギリアムは真面目な顔になって一呼吸置いてからだ。そのうえで答えたのだった。
「それが一番の夢だけれどな」
「持ちたいのじゃな」
「店は大きい方がいいからな」
ギリアムは己の考えをだ。素直に述べたのであった。

# 第三章

「だからな。やっぱり欲しいさ」
「左様か」
「しかしそれがどうしたんだい？」
ギリアムは屈託のない笑顔になってだ。そのうえで老人に問い返した。話をしているその間にもだ。店の仕事はしっかりと続けている。
「若しかしてストアでもくれるってのかい？」
これは冗談での言葉だった。
「爺さんの店でもな」
「そうだと言えば？」
老人の今の言葉はこれだった。
「どうするのじゃ？」
「えっ！？」
「わしも歳じゃしな」
そしてこう話してきたのだった。ギリアムに対してである。
「引退して店はもうやめておってな」
「おいおい、マジかよ」
「テナントは開けておる」
老人の言葉が出され続ける。
「賃貸しじゃがどうじゃ？金があればな」
「その話本当かい？」
ギリアムはまた真剣な、それもかなり問い詰めるものを中に含ませてだ。その顔で老人に対して問い返す。そうせざるを得なかった。
「冗談じゃないよな」
「金によるがな」
「多少はあるぜ」
真剣な顔のまま言葉を返す。

「冗談抜きにな」
「そうか。それなら話をするぞ」
「ああ、それじゃあな」
こうして老人の話を聞く。金のことは充分話が通じた。むしろその金のことはだ。ギリアムにとっては信じられないまでに安かった。
それでだ。驚いた顔になって言うのだった。眉は顰められている。
「失礼なことを言うぜ」
「何じゃ？」
「詐欺とかじゃないよな」
そう言ってしまう程のものだった。
「ニューヨークでその料金かよ」
「うむ、そうじゃ」
「じゃああれか？サウスブロンクスとかハーレムでも特に治安が悪いとかか？」
「最近どっちも治安がよくなってるじゃろ」
「まあな」
ニューヨークも一時に比べて治安がかなりよくなっている。地下鉄も奇麗になりかつての犯罪都市という汚名はかなり払底されている。
「それはな」
「住所は行ったな」
「ああ、マンハッタンな」
「そこじゃよ。それでその料金じゃ」
「嘘みたいだな。何だ？店で殺人事件でもあったか幽霊でも出るのか？」
今度はこんなことを言うギリアムだった。
「それで安いのか？」
「そうしたこともない」
このことも否定された。
「安心するのじゃ」

「じゃあ本当にその料金か」
「マンハッタンでじゃ」
「こういうのを僥倖っていうのか？」
ギリアムの顔も言葉もいぶかしむもののままだった。
「本当にな」
「そう思うなら思ってくれ」
「じゃあそう思わせてもらうぜ」
「では。それでいいな」
「願ったり叶ったりだ。じゃあそこに入らせてもらうぜ」
真剣な顔で述べたギリアムだった。
「それじゃあな」
「そういうことでな。さて」
「ああ、詳しい話するか」
これから老人と何度も話してだ。話を決めた。そうしてであった。
ギリアムはテナントに入った。そこでホットドッグ屋を出した。
彼の店はここでも公表だった。店の設備が充実した分売り上げはさらに伸びた。

# 第四章

彼は満足していた。そしてだ。テナントになっても来てくれる老人に対してだ。礼を言わずにはいられなかったし実際に言った。
「有り難うな」
「礼はいい」
老人は彼のそのホットドッグを食べながら言うだけだった。今ではフランクフルトやアメリカンドッグもある。ドリンクも種類が増えてバイトの店員も雇っている。
その賑やかさを増した店の前でホットドッグを食べながらだ。彼は言うのだった。
「美味いホットドッグを食わせてもらってるからな」
「けれどそれを作らせてくれたのはあんただぜ」
「わしがか」
「ここを提供してくれたからな」
にこりとしてこう老人に話す。
「だからな」
「だからか」
「そうだよ。本当に有り難うな」
そしてまた礼を言うのだった。
「お陰で今があるぜ」
「何、よいことじゃ」
「それであんたも前はここでホットドッグ屋をやってたんだよな」
「昔はな」
「昔っていってもほんの半年前までだったんだろ？」
これは老人から聞いた話である。何度も話しているうちにこのことも聞いたのだ。
「そうなんだろ？」
「そうじゃ。半年前じゃな、本当に」

「最近までやってたんだな」
「今は静かに余生を過ごしておるよ」
「そうか。もう店をやるつもりはないんだな」
「子供は全員家を出たし連れも死んだ」
こうギリアムに答える。
「何もすることはなくなったしのう」
「何だ、もう天涯孤独かよ」
「そうなるな。だから今はここであんたの美味いホットドッグを食わせてもらう」
「サービスしとくぜ」
商売人の顔になって笑っての言葉だった。
「それじゃあな」
「ああ。美味いものを食わせてくれ」
こんな話をしながら日々を過ごしていた。そしてそんなある日のことだ。毎日決まった時間に店に来ていたあの老人が不意に来なくなった。この日は最初から最後まで来なかったのだ。
ギリアムは閉店の時にだ。赤髪の青年にだ。いぶかりながら言うのだった。
「爺さん来なかったな」
「そうですね」
「何でだ？」
いぶかりをそのままに言った。
「何で来なかったんだ？」
「病気ですかね」
青年は少し考えてから述べた。
「それで、ですかね」
「歳だしな、あの人も」
「そうですよね。下手したら」
「ああ、大丈夫かな」
少し心配しての言葉だった。だが、であった。

# 第五章

その次の日にだ。店に一人の美女が来た。褐色の肌に黒い目をしたはっきりとした顔立ちである。長いすっきりとした黒髪を後ろで束ねている。ジーンズにジャケットを着た長身のすらりとした美人である。

その彼女が店の前に来てだ。言うのだった。

「あんたがギリアム＝キッシンジャーさんだね」

「ああ、そうだけれどな」

「話は聞いてるよ。爺さんからね」

「爺さんっていったらまさか」

「ああ、あんたに店をくれたあの爺さんだよ」

やはりだった。あの老人の話をするのだった。

「名前はビートルっていったんだがね」

「ビートル爺さんか」

「そう、ビートル＝アラゴね」

ギリアムはここで老人の名前をだ。今はじめて知ったのである。

「あの爺さんの名前さ」

「そういえばあの爺さん名前は一切言わなかったな」

ギリアム自身そのことに気付いたのだった。

「店まで譲ってくれたのにな」

「まあそういうことは言わない人だしね。大家の私だって名前を知ったのは契約だからね。それ以外で自分から名前を言う人じゃなかったし」

美女はこう話すのだった。

「それでね」

「ああ、それで？」

「爺さん死んだよ」

美女の顔がここで俯いたものになった。

「昨日ね」
「何っ？」
「実は前から身体が弱っていてね。朝に届けるものがあるから部屋に行ったらね」
「死んでたのか」
「いや、危なかったんだよ」
死んではいなかったのだという。その時はだ。
「もうね」
「危なかったのか」
「ああ、危なかった」
それをまた言う美女だった。そのはっきりとした強い顔立ちの美貌が曇ってしまっていた。
「ベッドから起きれなくなっていてね。あっという間だったんだよ」
「そうだったのか」
「それで間際にあんたと店のことを言ったんだよ」
そしてだ。美女はこう言うのであった。
「それでここに来たんだよ」
「俺と店のことをか」
「ずっと宜しくやってくれ。店を繁盛させてくれってな」
「あの爺さん毎日来てたしな」
普段はどんな話をしても手を止めることのないギリアムだったが今は違っていた。ついその手を止めてだ。そのうえで話を聞いていた。

# 第六章

「それこそな」
「美味いホットドッグだっても言ってたよ」
「そうか」
「ああ。それでね」
そしてであった。美女はあるものを出してきた。それは。
ＣＤだった。ブラザースフォアのＣＤである。それを出してきたのだ。
「これ、あんたにあげるってね」
「俺にか」
「昨日わかったんだよ。あの爺さんジャマイカ生まれでね」
「ああ、顔はそんな感じだな」
肌の色もだ。ジャマイカは黒人の国である。底抜けに明るくレゲエでも有名な国である。ギリアムも言われてそれに納得したのである。
「レゲエも好きだったらしいけれどブラザースフォアはね」
「さらばジャマイカか」
「その曲が好きだったみたいなんだよ」
「その曲を俺にか」
「最後にやるってな」
「形見ってわけだな」
ここまで話を聞いてであった。ギリアムの顔も神妙なものになっていた。そうしてそのうえでまた美女のその話を聞くのであった。
「つまりは」
「どうだい？それでね」
「それで？」
「貰ってくれるかい？爺さんのこのＣＤ」
こうギリアムに対して問うてきたのだった。

「あんたは。どうなんだい？」
「貰わないって言うと思うか？」
ギリアムはその神妙なものになった顔でだ。美女に返した。
「そんな話を聞いてな」
「じゃあいいね。他のは教会に寄付したり子供達に分け与えてってなったんだがね」
「それで俺にはこれか」
「爺さんがずっと聴いていた曲だってさ」
そのブラザースフォアのＣＤはだというのだ。
「音楽聴くとか聞いてなかったと思うけれどね」
「ああ、それはない」
実際になかったというのである。
「そういうことも言わない爺さんだったからな」
「だよね。自分のことは言わない人だしね」
「それでもか。俺にそのＣＤをか」
「そういうことさ。じゃあこのＣＤはあんたにね」
「ああ」
「確かに渡したよ。それじゃあね」
こう話してだった。老人は彼の前から姿を消した。そしてそのＣＤを受け取った彼はである。店に音楽をかけるようになった。その曲は。
「あれっ、ブラザースフォアか」
「しかもさらばジャマイカか」
「それをか」
「ああ、いい曲だろ」
店の客達に笑顔で話す。
「この曲な」
「ああ、確かにな」
「前から思ってたけれどいい曲だよな」
「昔からの名曲だよな」

「店にも音楽が必要だからな」
何故かけるのかは言わなかった。
「だからな」
「それでか」
「あんたも考えてるねえ」
「考えてないと商売はできないさ」
屈託のない笑顔に真実を隠す。そうしての言葉だった。
「だからなんだよ」
「そういうものか。それじゃあな」
「ホットドッグな。貰うぜ」
「ああ、サービスしとくぜ」
笑顔でそのホットドッグを渡し金を貰う。そうした商売の中でだ。
「爺さん、聴いてるぜ」
あの老人に思いを馳せるのだった。音楽を聴きながらだ。
「あんたの曲な。今な」
そのさらばジャマイカを聴いていた。マンハッタンの摩天楼の中にその曲が聴こえていた。それは繁栄するこの街に静かに奏でられていた。そこにあるものと共に。

マンハッタン＝レクイエム　　完

２０１０・５・２９

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5415n/

---

マンハッタン＝レクイエム

2010年10月8日14時27分発行